【曲目解説】

モーツァルト；歌劇「後宮からの逃走」序曲

「エキゾチズム」、異国への憧れが、芸術作品に結晶した例は、古今東西数多い。18 世紀、ヨーロッパでは、一時期のオスマントルコの軍事的脅威が去り、エキゾチックな「トルコ文化」が流行していた。あのベートーフェンも「トルコ行進曲」を書き、またモーツァルトも、有名なピアノ・ソナタ第 11 番やヴァイオリン協奏曲第 5 番で、トルコ風な音楽を取り入れている。本日演奏する「後宮からの逃走」もそうした流れの中にある作品である。

物語は、16 世紀のトルコが舞台、スペインの貴族ベルモンテが、トルコの太守セリムに囚われている恋人コンスタンツェを後宮から救い出すという筋立てである。このオペラは、ウィーンのブルク劇場で、ドイツ語によるオペラを成功させたいという、オーストリア皇帝ヨーゼフ 2 世の依頼により作られた。この作品は、ジングシュピールというジャンルに属し、歌以外は、レチタティーヴォではなく科白によって劇が進行する。なお初演は、1782 年 7 月 16 日、ウィーンのブルク劇場である。

イッポリトフ＝イワノフ；組曲「コーカサスの風景」

イッポリトフ＝イワノフは、1859 年ロシアに生まれた作曲家で、ペテルスブルク音楽院でリムスキー＝コルサコフに師事している。本名はミハイル・ミハイロヴィチ・イワノフだが、同時代に同姓同名の作曲家がいたため、その作曲家と区別するために自ら「イッポリトフ」という従兄の名を冠したのである。彼の作品はこの曲を除くとほとんど演奏されないが、２曲の交響曲のほか、10 曲以上の管弦楽曲、数曲の室内楽曲、歌劇などがある。

組曲「コーカサスの風景」は、この作品 10 のほかにも組曲「イヴェリア」（スペインのある半島ではなく、グルジア地方の古称）という別名を持つ作品 42 があり、それぞれ第１番、第２番と区別することもある。コーカサスは、旧ソ連のグルジア、アルメニア、アゼルバイジャンを含む黒海とカスピ海に挟まれた地方。彼は、音楽院卒業後約 10 年間チフリス（グルジアの首都）に赴任するが、この曲はその間に形がまとめられ、モスクワに戻った翌年の 1894 年に完成した。

第１曲「峡谷にて」　ダリヤール峡谷の風景を描いた曲で、峡谷にこだまするホルンに始まり、ヴァイオリンとヴィオラがテレク川のざわめきを表す。中間部は、まずコーラングレ（イングリッシュホルン）、続いて弦楽器で美しい主題が奏される。

第２曲「村にて」　峠を越えた最初の停車場であるムレタ村の風景を表している。アラビア風のメロディをコーラングレが奏でると弱音器を付けたソロ・ヴィオラがそれに応える。中間部は３拍子のリズムが特徴的な東洋風の舞曲。

第３曲「モスクにて」　グルジアの港湾都市バトゥミのイスラム教の寺院で歌われていたメロディを用いた静かな曲。木管楽器とホルン、ティンパニで演奏され、弦楽器は用いられていない。

第４曲「酋長の行列」　組曲中一番有名なトルコ風の行進曲で、器楽合奏や吹奏楽などにも編曲されよく演奏される。「酋長」と訳されているが、原題の「サルダール」は軍隊の司令官のことで、いわば「軍隊行進曲」である。

グノー；交響曲第１番　ニ長調

グノー（1818・６・17～1893・10・18）は、パリに生まれたフランスの音楽家、一般には、バッハの「平均率クラヴィーア曲集」第 1 巻第 1 曲の前奏曲に新たなメロディーに付けた「アヴェ・マリア」の作曲者として知られている。代表作としては、歌劇「ファウスト」となろうが、彼は幅広いジャンルにわたって作曲しており、大変敬虔な人物で聖職者になろうとしたこと再三であり、そのため宗教曲の傑作も多い。バッハの音楽への傾倒は、メンデルスゾーンの姉で、優れたピアノ奏者であった、ファニー・ヘンゼルとの出会いからである。彼女からドイツ音楽への目を開かされたことが、後のグノーの大きな財産となった。

本日演奏する「交響曲第１番」もドイツ風な構成感を持っているが、重々しい雰囲気はなく、特に和声進行にフランス音楽らしい洒落た味わいがある。他人の作品に新たな旋律をのせるという、「アヴェ・マリア」で見せた職人的練達は、この曲でも随所に窺われる。雰囲気の変化と全体の統一感の程よいバランス、軽快さとそこはかとない哀愁、そして華やかな力強さをもった佳品と言えよう。